知求会ニュース

2020 年 4 月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　第 73 号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

ブラボ 小波津 ホセ ラウル(国際学研究専攻・10 期生)さん・森谷亮太(国際学研究専攻・8 期生)さんが、2020 年 3 月 24 日(火曜日)に昨秋授与された趙美慧さん・胡哈斯其木格さんに続いて第 27 号～第 28 号の博士号学位を授与されました。なお、論文要旨などは本号の「博士録 52」と次号の「博士録 54」に掲載されますので、併せてご一読下さい。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)（東北大学）2 名・博士(文学)（名古屋大学）/（筑波大学）/ (東北大学) 3 名・博士(人文科学)（お茶の水女子大学）1 名・博士(人文学)（パリ東大学）1 名・博士(芸術学)（筑波大学）1 名・博士(社会学)(一橋大学) 1 名・博士(農学)（東京農工大学連合大学院）2 名・博士(国際学)(宇都宮大学) 18 名・博士(経済学) (名古屋市立大学) 1 名・博士(観光経営学) (慶熙大学校) 1 名・博士(人間・環境学)(京都大学) 1 名・博士(学術) (杏林大学) / (筑波大学) / (東京大学) / (一橋大学) 4 名・博士(国際開発学)（名古屋大学） 1 名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン) 1 名の計 38 名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2020(令和 2)年 3 月 24 日(火曜日)午後 3 時 00 分から 5 号館 A 棟 4 階大会議室にて、2019 年度学位記授与式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第 18 期生の**渡邉岳**さん、第 20 期生の**王衛澤**さん・**王爽**さん・**曹倩倩**さん・**張喬**さん・**鄭斯琦**さんの 6 名でした。国際文化研究専攻の第 20 期生の**王向苗**さん・**耿蘭竺**さん・**TRAN VIET LINH** さん・**楊漪**さん・**劉志鑫**さんの 5 名でした。国際交流研究専攻の第 14 期生の**清水友美**さん、第 15 期生の**韋哲雄**さん・**于雅楠**さん・**内田詩乃**さん・**袁臻**さん・**黄瑩**さん・**江強**さん・**項馨磊**さん・**寿琳莎**さん・**眞壁希予**さん・**町田星羅**さん・**葉雲婷**さん・**RAHMAN SHEIK HABIBUR** さん・**劉琼**さん・**劉彤**さん・**芦倩**さん・**LAMA YUBRAJ** さんの 17 名でした。計 28 名でした。

なお、今回が国際学研究科博士前期課程の最後の学位記授与式になります。1999 年 4 月に国際学研究科修士課程（のちに博士前期課程に名称変更）開設後、21 年目にして廃止されました。また、博士後期課程は地域創生科学研究科に設置認可が下りれば、おそらく来年度は新入生の受入停止となり新たな組織に引き継がれていくことになるでしょう。

◎令和元年度 同窓会連絡協議会報告

2020 (令和 2) 年 2 月 28 日(金)午後 3 時から、宇都宮大学本部棟 3 階「第 1 会議室」にて、令和元年度同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は石田朋靖学長・藤井佐知子理事・池田宰理事・佐藤規朗理事・伊東明彦 教育学部長（代理）・齋藤高弘 農学部長の大学側 6 名と事務局担当者 3 名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・増渕茂泰 教育学部同窓会会長・阿久津嘉子 同事務局・清水由行 工学部同窓会会長・上澤和彦 同副会長・松澤康男 農学部峰ヶ丘同窓会会長・大塚国一 同副会長・田坂聡明 同理事長の同窓会側 9 名でした。議事内容は、協議事項として特になく、各学部等同窓会からの活動報告・要望等として、1．各学部等同窓会の活動報告等について、2．大学に対する要望等について、3．その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 教職員人事異動

田代真一国際学部事務長

田代真一さんが、3 月 31 日をもって退職されました。国際学部には 2018 年 4 月から 2 年間在籍され、多くの方が事務長にお世話になったことと思います。大変お疲れ様でした。後任には農学部事務長 **沼尾建男**さんが兼任で着任されました。

◎ 掲載記事紹介

1．宇都宮大学入学案内 2020 76-77 頁に、「大学院」コーナーで「台湾の介護分野における外国人労働者受け入れに関する問題を探求する」の標題で鄭安君さん(国際学研究科博士後期課程第 10 期生)の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1．宇都宮大学入学案内 2020 16-17 頁に、「UU.Advantage 特集 2 innovation × global ×local －世界への翼－」のコーナーで「紅茶プランテーション農園の子どもたちに課外活動支援を」の標題で栗原俊輔先生の記事が掲載されました。

2．宇都宮大学入学案内 2020 16-17 頁に、「UU.Advantage 特集 2 innovation × global ×local」のコーナーで「世界から宇都宮大学へ！キャンパスで国際交流」の標題で留学生アドバイザーとして松塚史郁さん（掲載時国際学科 2 年)、チューター制度について小畑晋吾さん（掲載時国際社会学科 4 年）の記事が掲載されました。

3．宇都宮大学入学案内 2020 40-45 頁に、「国際学部」のコーナーで「授業クローズ UP! 地球環境政策論」の標題で髙橋若菜先生、「3 年生から始まるゼミ紹介」の標題で出羽尚先生の記事が掲載されました。また、学生からの声としてアギーレ・ナルミさん（掲載時国際学科 3 年)、卒業生の桑田梢さんの記事があり、留学の体験談として米国留学の山本絵理さん（掲載時国際学科 4 年）や韓国留学の立川朱音さん（掲載時国際学科 4 年）の記事、HANDS プロジェクトの体験談として齊田雛さん（掲載時国際学科 2 年）の記事が掲載されました。

4．宇都宮大学入学案内 2020 98-99 頁に、「宇都宮大学の卒業生から、キミへ」のコーナーで「世界に自覚的に目を開き、その成り立ちを読み解いていく。自分の殻を破ってくれる人たちとの出会いをベースに意志的に自分の人生をつくっていこう。」の標題で写真家、ジャーナリストの小原一真さん（国際学部国際社会学科第 10 期生）の記事が掲載されました。https://web-pamphlet.jp/utsunomiya-u/2020p/html5.html#page=101

◎　刊行案内

1．鯨井佑士先生（国際学部名誉教授・栃木学習センター元所長）が 2019 年 12 月 21 日に朝日出版社から、『藤沢周平の読書遍歴』を刊行しました。この本は、放送大学栃木学習センターでの最後の面接授業「藤沢周平と外国文学」（2013 年 2 月）がもとになったものです。　https://www.asahipress.com/bookdetail_norm/9784255011486/

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1．平和構築入門：紛争と和解　2020年06月07日（日）1時限～4時限、試験・レポート等
2020年06月14日（日）1時限～4時限、試験・レポート等
藤井広重先生（国際学部助教）

2．英語の音声　2020年05月30日（土）1時限～4時限
2020年05月31日（日）1時限～4時限、試験・レポート等
湯澤伸夫先生（国際学部教授）

研究室訪問 51 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「近代日本のグローバル思想史」とは

アミン・ガデミ

コロナウイルス が蔓延している 2020 年の現代日本において、「ヘルツェゴビナ」というのはなかなか馴染みのない存在に感じられるかもしれない。しかし、1870 年代中の日本においては、知識人の間でさほど遠く感じられていなかったようだ。むしろ、ヘルツェゴビナと日本は意外と似ているように見えた。コロナウイルスは世界が実に一体であり日本が地理的な意味でしか島国でないことを今、我々に示しているように、ヘルツェゴビナは同じことを明治前期の新聞読者に現していた。

私は、「近代日本のグローバル思想史」の研究に従事している。分野名は少し変に聞こえるかもしれない。それはもっともだ。20 年前は「グローバル思想史」という言い方はほとんどされていなかった。「思想史」そのものはもちろん長い歴史を持っているが、思想を「グローバル」な視点から学ぶべく学術界で「グローバル思想史」という研究分野が拓かれてきたのは、21 世紀に入ってからのことだ。

分野ができているからといって、その内容がはっきりされているわけではない。「グローバル思想史」というのはそもそもどういうことなのかが、分野の一つの重要な課題である。Samuel Moyn(1972-)と Andrew Sartori(1969-)という米国の歴史家が述べているように、ある「グローバル思想史家」は比較史に従事し、直接な関係がなくても過去の思想家を同じ研究枠組みに主体的に入れ、比較手法によって思想を検討するというアプローチをとる。その一方、他のアプローチもありえる。研究者が自分のグローバルな枠組みを勝手に作っていく代わりに、実際歴史的人物がどのように「グローバル」という概念を捉えていたかを研究することもできる。「グローバル」とは、歴史上どのような意味を持っていたのだろうか。私は、後者のアプローチを日本に適応しようとしている。

このグローバルな視点から日本史を考えていくと、歴史で以前見えなかったことが突然見えるようになり、軽視されてきたことが突然非常に重要なかたちで浮かぶ。すでに過ぎ去ったように見える日本の過去がガラッと変わる。1877 年の西南戦争を例として考えていこう。

旧薩摩藩が明治政府に対して反乱を起こした西南戦争といえば、むろん西郷隆盛(1828-1877)が思い浮かぶだろう。西郷は当然、幕末維新の日本においてもそれ以降の現代まで至る日本の文化史においても巨大な人物であり、西南戦争での死もあまりにも悲劇的で、現代日本の「公共記憶」(public memory)に重要な位置を占めている。学術界でも、西南戦争を紹介する顕著な著書は、ほぼほとんど西郷を通して戦争を語っている。

しかし、西郷があまりにも大きい人物であるからこそ、その陰で戦争の他の側面が見えなくなってしまう。実は、西南戦争は非常に複雑な戦争であり、簡単に「士族反乱」として片付けることはできない。イデオロギー面から見れば、様々な異なる考え方が戦争で戦っていた。西郷とあまり関係ないこともあった。

さて、ここでは「ヘルツェゴビナ」が重要になる。西郷を歴史の舞台から少し退けさせると、ヘルツェゴビナがかわりに登場する。周知の通り、西南戦争は 1877 年 2 月に勃発した。その 2 ヶ月後、ロシア帝国とオスマン帝国の間に「露土戦争」という画期的な戦いも勃発した。露土戦争のきっかけとなったのは、数年前にオスマン帝国の領土であったヘルツェゴビナとセルビアの反トルコ独立反乱だった。ロシアはイスラム教のトルコを打撃し、同じスラヴ人でキリスト教徒であったバルカン半島住民たちを援助するために、オスマン帝国に軍隊を出した。当時の親薩摩軍・反明治政府の新聞を読んでみると、日本人は露土戦争に非常に興味を持っていたことがわかる。新聞記者は常にリアルタイムで日本国内の戦争とバルカン半島での戦争を比較しながら報道していたのだ。日本における明治政府に対する反乱を正当化するために、そして反政府軍人を励ますために、頻繁にヘルツェゴビナとセルビアの反トルコ反乱を挙げていた。そして、明治政府のいわゆる「専制政府」を

非難するために、常にトルコの「専制政府」と比較していたのだ。

「専制政府」という概念自体もグローバルの観点から理解していたのである。親薩摩軍の新聞記者は、バルカン半島と西南日本での戦争をフランス史とアメリカ史を通して解釈していた。日本で圧政政府を倒し「民権」を実現するために、アメリカとフランスのように「革命」を起こす必要があると述べていた。西南戦争も、ロシアの支援を得たバルカン半島の反乱も、まさにそのような「革命」であると暗示していた。日本の内戦は実に「グローバル思想」の戦いである、と語っていた。

では、このように日本のグローバル思想史を研究することは、現代においてどういう意味を持つのだろうか。周知の通り、江戸時代には前例があったとしても、新聞というのは明治前期の新しい社会的現象であった。そして、その新聞に情報を提供していた電報も、1870年代に導入されたテクノロジーだった。この新しい発展によって、明治の公共圏では実の「世界観」が生まれてきたのである。公共圏の中の日本人は自分の国の出来事、自分の国の惨めな内戦を理解するために、世界史、世界ニュースを用いていたのである。自分を「グローバル」な人たちと見なしていたのだろう。西洋化や和魂洋才、福沢諭吉(1835-1901)や森有礼(1847-1889)の思想という長年研究されてきた課題を超えて、日本における「グローバル意識」そのものを研究対象にすると、「グローバル」とは何か、日本の「グローバルな世界」の中での位置づけを慎重に考え直さざるを得ない。

文系ってなんの役に立つんだろう、と近頃よく聞くかもしれない。コロナウイルスの脅威が全世界を覆い、世界がなかなかそれを乗り越えられない現在において、「比較文化史」や「比較思想史」から生まれる深遠なグローバルな問を考えていくことは、緊急で極めて大事なことだと思う。宇大の授業で学生たちと一緒にこれらの問について考えていけるのは、私にとって至上の光栄である。

（2020年3月16日原稿受理）

博士録51 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

「近代内モンゴルにおける医療衛生の移入と受容に関する研究
—聖母聖心会・善隣協会・興蒙委員会を中心に—」

胡哈斯其木格（コハスチムガ）

本研究は、内モンゴルにおける近代的医療衛生の導入と定着のプロセスを植民地・半植民地的国際関係の中で究明することを目的としている。具体的にはカトリック教聖母聖心会(CICM)と財団法人善隣協会、そして興蒙委員会の活動を取り上げる。聖母聖心会の活動を西洋からの宣教師が担い、財団法人善隣協会は日本人が運営していた。そして、モン

ゴルの復興を目指したモンゴル人が中心になって医療衛生の近代化を進めた組織が興蒙委員会である。

本研究ではまず宣教師たちはどのような背景の下で、如何なる手法で内モンゴルに進出し、何故現地において医療衛生の事業に焦点をあてたのかという点から着手して考察している。次に大日本帝国の海外への膨張過程の中で、善隣協会を中心とする日本人は内モンゴル草原地帯でどのような調査活動を展開し、医療衛生の近代化を推進したかという点について検討を加える。そのうえで、宣教師たちと日本の善隣協会とを比較し、両者の間の共通点と差異を踏まえた上で、両者と出会ったモンゴルはどのような目的をもち、また如何なる対応を講じたのか。そしてそれは結果としてどんな形の近代西洋医療衛生が内モンゴルに移植されたのか。本論文はこのような課題を意識しつつ、内モンゴル社会における医療衛生の近代化のプロセスと性質、及び影響を究明する。

本論文が使用する基本史料は日本外務省外交史料館所蔵原典資料と防衛省図書館所蔵原典資料、それに善隣協会調査部『善隣協会調査月報』と雑誌『蒙古』である。また、必要に応じて中国側に残るモンゴル語と中国語档案（文書）資料も併用している。

本論文の結論では、一般的に近代化は政治・経済・文化のあらゆる面にわたって都市から農村(草原)へと同心円状に浸透していくものと捉えられてきたが、内モンゴルにおける西洋からの宣教師たちが主導した医療衛生の近代化はその逆であったといえる。それは、清朝政府と中華民国の為政者側が西洋列強の勢力が都市部に根を下ろすのを防ごうとして農村(草原)地帯に布教権を与えたことが原因として挙げられよう。また、善隣協会が主導する医療衛生の近代化も草原での巡回医療や診療所の設置から、包頭や厚和といった都市部での近代病院の建設へと、政策を転換し、実践していくのである。草原地帯から都市部へという近代化の推進方法は、植民地や被支配地域における医療衛生の近代化を普及させる際の、ユニークなパターンであった。それは、進出した地域が遊牧民の古くから居住するモンゴルにおいて、草原地帯のモンゴル人が当時はまだ強い政治力を有していたからであろう。モンゴルの政治的経済的、社会的拠点が草原部にあったからであろう。この点は、同じ農村(草原)地帯から都市部へとシフトを実現させた西洋からの宣教師たちが行った近代化との差異でもあろう。

アジア近現代史研究では、19 世紀以後に確立された「帝国の学知」の一環たる近代西洋医学にもとづく医療・衛生事業が植民地統治にどのような役割を果たしてきたかは軽視されてきたことから、空白が生じた。本研究は従前の諸研究を検討した結果、このような空白を埋めようと貢献するものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

博士後期課程への感想

自分の無知に痛感して博士後期課程へ進学を決意した。博士後期課程では、幅広い歴史の出来事の中から取り組んでいる課題の根拠となる史料を見つけ出し、縦横につなげて説

明できる能力を身に付けたことが博士後期課程を修了した現在の感想です。その道のりは、喜怒哀楽の過程と言えるでしょう。

博士を目指している後輩たちへ博士学位は一つの免許と認識してください。日本の文系博士修了条件として、最低 3 年間に学会誌などで複数の学術論文（査読ある）を掲載すること、そこから博士学位論文を書き上げ、審査委員の審査を受けて合格することです。博士の学位を取得後、独立した学者として自分の行っている研究の社会的な責任と義務を背負う独立した研究者となります。

博士後期課程へ行くことを決断する前に経済と生活面の自覚が必要と思います。途中から逃げるより最初からいかない方がいいと思います。実は、途中から辞める人が少なくないからです。最後に学位を取ったとしもその専門で就職できるとは限らないので、じっくり考えてから行動することです。同じ分野の研究に取り組んでいる教員や先輩が多くいる専攻や研究室へ進学することはお互いの勉強や議論する相手がいて非常に重要だと思います。そうではない場合、独学の博士になってしまう可能性もあります。学会や研究会に参加してそこで交流することはもっとも重要です。

学問を求めて努力する以上気持ちにいい仕事はないので、楽しんで学位を取れることは最高に幸せですから、それを感じ取るまで努力しましょう。

最後に、宇都宮大学で学んだ間に指導してくださった先生方と職員の皆様に大変お世話になり、心からお礼申し上げます。また、経済面や生活面から多くの支援をいただいた学術振興機構と国際ロータリー2550 地区米山記念奨学財団の皆様にもお礼申し上げます。

（国際学研究科国際学研究専攻　第 8 期修了生）

（2019 年 12 月 31 日原稿受理）

博士録 52

Color-blindness in Transition: A Foucauldian Genealogical Discourse Analysis of School Color Vision Testing in Japan

変遷する色盲：日本の学校色覚検査におけるフーコーの系譜学的言説分析

MORIYA Ryota

（森谷 亮太）

博士論文要旨

本研究は、日本において色盲観がどのように構築され変遷してきたか、学校色覚検査の変遷を分析することで明らかにすることを目的としている。本研究では、フーコーの系譜学的言説分析法を採用し、様々なテクストから色盲観の変遷を探った。また、本研究では障害学の視点を援用し、強制的色覚検査と選択的色覚検査の時代それぞれで構築された異なる色盲観についても明らかにしている。分析の結果、色盲観が色覚検査不合格者から、自らの色覚ニーズを自己主張する個人へと変遷する過程が明らかになった。

第一に、本研究では強制的学校色覚検査の時代において、色盲観が言説的に構築され変遷した過程を明らかにした。学校色覚検査が学校健康診断に始めて導入された 1920 年に、疾病がない状態を健康とする学生の健康観が生まれた。学生の健康を増進することを目的として、主に石原式色覚検査表（以下、石原表）を使用して色覚を欠損、或いは異常の疑いのある学生がふるい分けられた。したがって、本研究の分析結果は、強制的学校色覚検査の時代に、色盲の医学モデルが言説的に構築されたことを示唆している。

第二に、本研究では、強制的学校色覚検査撤廃運動の時代、色盲観はそれまでの医学的な意味での色覚の欠損、或いは異常の疑いを色盲とする医学モデルから、石原式色覚検査表で不合格となる者を色盲とする色盲観へと変遷する過程を明らかにした。このような石原表誤読者を色盲とする色盲観は、色覚異常当事者とその家族の声により構築されていた。彼らは、色覚差別の根絶を主張していく活動の中で、強制的（この運動側の視点では、制度的と呼ばれる）学校色覚検査の撤廃にも注力していった。したがって、本研究の分析結果は、このような学校色覚検査制度の移行時期において、色盲の社会モデルが言説的に構築されたことを示唆する。

第三に、本研究では、2003 年以降の選択的学校色覚検査により、自らの色覚ニーズを自己主張する色盲観が言説的に再構築された過程を明らかにした。具体的には、若い世代の色覚異常当事者のライフストーリーを収集し、詳細に分析した。分析の結果、彼らは状況に合わせて、自らの色覚ニーズを戦略的に自己開示していることが明らかになった。したがって、本研究の分析結果は、色盲の自己認識、自己診断、自己開示というプロセスを経て言説的に構築される戦略的色盲モデルというこれまでにない新たな視点を提起する。

結論として、本研究は、学校色覚検査において変遷する色盲観を明らかにした。本研究が明らかにした戦略としての色盲モデルは、軽度障害が社会的に構築される過程についての新たな視角を提起する。その意味で、本研究の学術的意義として、本研究が明らかにした視点は、障害学の理論的発展に貢献しうるものである。また、本研究の社会的意義として、本研究の成果は、多様なニーズを抱える学習者の教育機会向上にも貢献しうるものである。

博士課程で研究を続けられる皆様へ

2011 年に博士前期課程に入学してから博士論文の完成まで、国際学研究科の先生方や総務の方々には長い間お世話になりました。特に、博士後期課程での指導を快く引き受けてくださった戚先生と、博士前期課程で指導して頂いたライマン先生（現　青山学院大学）には、この場を借りて心から感謝の言葉を述べさせていただきたいです。特に、戚先生には、博士論文研究を継続して英語でご指導いただき、研究成果を海外へ問うことの大切さに気が付かせて頂きました。研究を英語で行おうと思い立ったきっかけは、そもそも自分自身の「色覚異常」という障害と向き合う為の戦略でした。日本で不合格となりカナダで合格した身体検査、英語の視点を通して、それまで「異常」のレッテルを張られた自らの色覚を初めて相対化して見ることができました。同じような境遇の当事者にも、自分と同

じ「気づき」を与えたいという思いでこれまで研究を英語で行ってきました。研究を続けるうちに、日本の色覚問題の改善に尽力されてきた高柳泰世先生にも、世界に日本の色覚問題の現状を伝えてほしいという応援して頂けたこともモチベーションとなりました。先生方、長い間ご指導、本当にありがとうございました。私は2014年に博士後期課程に進学してから、休学と長男の誕生を経て、2018 年に日本学術振興会の特別研究員として復学しました。休学中も研究は継続しておりましたが、それまでの研究枠組みをもう一度考え直した方が良いのではないかと悩んだこともありました。そのような時期に助けになったのが、研究会の仲間と、国際学会での研究報告の機会、と非常勤先の教え子たちでした。

博士後期課程に進学してから、主に東京を中心に、複数の研究会に継続的に参加していました。特に、同じ関心を持つ大学院生たちと定期的に会い、自分たちの研究成果や悩みをあれやこれやと自由に議論できる研究会の場は、自分の研究の枠組みや方向性を見直す良い機会になりました。どうしても学生の間で関心がばらつきがちの国際学研究科では、学外で同じ関心を持つ仲間と研究会を立ち上げるのも、良い学びの機会になると思います。

国際学会での研究報告も、非常にたくさんのフィードバックを貰え、自らの研究を発展させる良い刺激になりました。特に、大きな国際学会では、私の専門としている障害学の分野の研究を進めている研究者も集まりやすく、理論的なアドバイスも得られやすかったです。また、日本の文脈で考えてきたことが、英語や海外の文化の視点を通すことで、新たな気づきにつながることもありました。特に、私の博士論文研究のように、対象を日本社会としている場合、海外の研究者からの視点は、研究の発展に有意義なものになると思います。

最後に、非常勤講師先の大学での教え子たちから、研究への応援の言葉をもらったり、学期の最後に温かい言葉を残してもらえたりしたことは、研究成果が人の役に立っていることが実感できて、研究をより発展させる良い刺激になりました。また、博士後期課程修了後も、大学教育の現場で研究に携わっていく上で、良い経験にもなりました。

私の経験が、今後国際学研究科で研究を続けられる皆様の研究の発展に少しでも役立ちましたら、とても嬉しいです。

（国際学研究科国際学研究専攻　第 8 期修了生）

（2020 年 2 月 21 日原稿受理）

知究人 35　第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 30　第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 30　第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「イギリス留学体験記」

栗原 皐

私は 2018 年 9 月から 2019 年 5 月までイングランド北西部にあるセントラルランカシャー大学 school of Language and Global Studies の Pre-sessional English Exchange Programme というコースに留学しました。大学受験までアメリカ英語を学び、世界には「英語」しかないと思っていたのですが、様々な国や地域を訪れて多種多様なアクセントがあることを知りました。その中でもイギリス英語が魅力的で、イギリスの文化にも興味があったためイギリス留学を決めました。

留学中は学校の授業だけではなくクラスメイトとの交流やイギリス国内旅行など出会うもの全てが私にとって新鮮な学びとなりました。その中でも特に印象に残ったことは、イギリス人のワークスタイルと国民性です。まず、ワークスタイルの違いについて、大学では先生が生徒より早く帰ることは珍しくありませんでした。また、日本では 24 時間営業のお店が多いのに対し、イギリスでは早いところでは 18 時ごろに閉まり、遅くても 22 時くらいまでしか開いていません。慣れれば困ることも無かったので日本も見習うべきだと思っていたところ、ちょうど最近日本でもコンビニエンスストアが 24 時間営業を廃止する動きが増えていると知って、自分が留学で感じたことは間違いではなかったのだと改めて実感しました。また、働いている人を見ても座って接客していたり、髪色やネイル、ピアスも自由だったりと日本よりも個性を尊重している様子が見られました。自分が実際に接客されて不快には感じなかったので、これも近い将来日本に広がるかもしれません。

次に、イギリスの国民性は日本と同じく伝統や格式を重んじる一方で、日本より人と人との距離が近いように感じました。例えば、私がくしゃみをした時に知らない女性が“Bless you.”と声を掛けてくれたり、出先で財布を失くして困っている私のために偶然居合わせた人が警察やその日泊まる場所を探してくれたりしました。また、イギリスは日本よりホームレスの人が多いのですが、道行く人が食べ物を渡したり、亡くなったホームレスの人に写真と花束を添えていたりする場面にも遭いました。日本人は近所付き合いや会社付き合いには積極的な面もありますが、知らない人とは最低限のコミュニケーションしか取らないように思います。

このようにイギリスでの生活は自分を大切にする働き方と人の温かみを感じる貴重な経験となり、これはこれから就職活動をするにあたって重要な軸としていきたいと思います。

（国際学部　国際文化学科　第 4 年次在校生）

（2020 年 3 月 23 日原稿受理）

「留学体験・経験報告」

岩舘 菜々子

私は、英語が話せるようになりたかったのと、自分の視野を広げ、外からの日本という国を見てみたいと思い大学 3 年生の後期から半年間アメリカのヴィンセンス大学へ留学しました。留学前にすべきことは、とにかく単語力を上げることと、自分自身のこと日本や住んでいる地域のことを知っておくことだと思います。現地での会話は、自分たちが学習してきた文法がほとんどでしたが、単語がわからないとコミュニケーションをとることが難しくて、もっと事前に語彙力を増やしておけばよかったと思いました。単語力があると、現地で学べるスラングや会話力を集中して吸収することができると思います。また、アメリカの学生やホームステイをした家族、他の国からの学生たちは日本に比べて自国に対する関心が深く、日本にも興味を示してくれることが多かったです。例えば、日本の火葬という制度についてや家族という定義について聞かれたこと、さらには、授業で日本におけるアメリカのイメージを聞かれたこともありました。

留学先での一番の課題は自分の意思をストレートに言葉で相手に伝えることでした。私は寮で生活をしていましたが、ルームメイトとは気が合わず、会話もない日が続きました。自分が相手にどうしてほしいのかというものは日本であったら、私の態度や小さな言動から察してもらえたかもしれませんが、自分で言葉にして相手に発信しないと何も伝わらないということを学びました。そこからは、授業や友人たちとの会話の中でもまず、自分の考えをシンプルに伝えることを意識しました。その結果、英語力が不足していても簡単な単語ではっきりと言葉にすることで以前よりスムーズなコミュニケーションにつながりました。

この経験は何も言わなくても伝わったり、周りが察してくれたりする日本では味わえなかったと感じます。さらに、アメリカには将来的に日本に留学したい、日本で仕事を探したいという学生が多いということも初めて知ることができました。彼らに聞くと、日本の文化や人間性が好きであったり、日本の技術や企業に興味があるなどがその理由でした。日本で済むことに興味を持ってくれている人たちと出会ったことは、日本を外から見る機会になり、日本のいい所というのも改めて認識することができました。

そして、帰国後は卒業研究や就職活動が始まり、卒業研究では日米のテレビコマーシャルの比較というテーマで、留学で知り合ったアメリカの友人たちにも協力してもらいながら行うなど学業の面でも幅が広がったと思います。就職活動においても、自身の視野が広がったことやアイデアを発信する術を学んだことで自信を持って臨めています。

これから留学を考えている方たちも、語学力だけではなく、考え方という面で得られるものが多いので、帰国後の生活をしていくうえで何よりも自分の可能性が広がったような達成感は貴重な経験だと思うので、行った際には全力で楽しんでほしいです。

（国際学部 国際学科 第 4 年次在校生）

（2020 年 3 月 12 日原稿受理）

学生サロン 19　知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「経験したくとも、なかなかできない経験を生かす：
国連大学グローバル・セミナーへの参加と UIPJ シンポジウム開催の経験から」

榊原 彩加

私は 2019 年 4 月から本学の研究サークル宇都宮国際平和と司法研究会（UIPJ）に入り、たくさんの素晴らしい機会に巡り会いました。今回はその中から 2 つご紹介したいと思います。

1 つは、8 月 26 日～29 日に行われた「国連大学グローバル・セミナー　第 35 回湘南セッション　グローバルな行動で国際テロに立ち向かう」への参加です。このセミナーは、日英の両言語を使用し、4 日間の合宿形式で進められ、国内の大学生や大学院生、若い社会人を対象に、今日の喫緊の課題について学びを深め議論をする場です。講義には防衛大学校、国連の化学兵器禁止機関、また、メディアからも共同通信社などから講師がいらっしゃり、異なる立場から見たテロリズムについて深く学ぶことができました。また、4 日間のセミナーの中では、他大学の非常に意識の高い学生と交流する機会があり刺激を受けました。大会などで他大学の学生と競うことはあっても、自分たちの夢や目標について語り合ったり、議論を重ね 1 つの結論を導いたりする機会は滅多にありません。私が今まで触れたことのないような考えや情報を持った学生と交流することは、私のこれからの学生生活やその先を考える上で、得難い経験になりました。セミナーの最終日には、立派な修了証書を頂き、また、運営スタッフの方から指名いただき、思いがけず日本人の学生代表として参加者の前で本合宿での学びについてスピーチをする機会をいただきました。満足のいくものとはなりませんでしたが、このような機会をいただけたことを一つの自信として、これからの学業や活動に生かしていきたいです。（UIPJ にて参加報告をしました。URL: https://ameblo.jp/uipj/entry-12519712141.html ）

もう 1 つは、11 月 15 日に行われた第 2 回 UIPJ 公開シンポジウムでの研究報告です。基調講演を外務省から野口元郎国際司法協力担当大使が務め、本シンポジウムは、国際学部と多文化公共圏センターが共催となり、都内から NGO の方も参加してくださるなど盛大に開催されました。私達 UIPJ は、ロヒンギャの事態に国際社会は何ができるのかという問題意識のもと、ローカル正義を用いてロヒンギャ難民に補償を提供できる可能性について考察した研究を報告しました。研究自体は今年の 8 月から始め、UIPJ ではロヒンギャ問題の解決に向けて様々な方法を検証しながら 3 か月間かけて結論を導き出しました。これだけ長い間 1 つの事象について研究するということは、普段の授業ではできません。準備は大変でしたが、リサーチクエッションやこれへの回答を、自分たち自身のアイディアを出し合いながら検討し合うことで、確かな成長へとつながったと思います。しかし、このシンポジウムで 1 番特別だったことは、私たちの研究発表を実務の最前線で様々な問題を

日本の代表として取り組まれている野口元郎大使に聞いていただき、さらにはコメントをいただけたことです。大使は、カンボジア特別法廷最高裁判事や国際刑事裁判所被害者信託基金理事長等を歴任された方で、私が使った参考資料の引用でも何度もそのお名前を拝見しました。非常に緊張をしましたが、そのような方に私たちの研究に対してコメントいただけたことは大変光栄なことでした。シンポジウム後に挨拶に伺った際には、「今回の発表はひとまず成功だったと思います。研究発表は経験を積み重ねることが大事なので、これからも頑張ってください。」というお言葉をいただき、これからの活動に向けた大きな励みになりました。(本シンポジウムについて報告しました。URL：https://ameblo.jp/uipj/entry-12545628719.html)

上記のような経験は、希望してもできることではありません。この貴重な経験を通して感じたことをしっかりと胸に刻み、また、次の学年に伝えていきたいと思います。UIPJでは新しい仲間を現在募集しています。授業では学べない学びや刺激を体験してみませんか？

最後になりましたが、このような報告の機会をくださった知求会の皆様に感謝申し上げます。

(国際学部　国際学科　第 3 年次在校生)

(2019 年 12 月 6 日原稿受理)

キャリア指南13　現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム　2020 年の卯月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「百聞は一見に如かず」

趙 敏

皆様、こんにちは。国際学研究科国際学研究専攻修了の趙敏です。私は現在、宇都宮大学の非常勤講師として中国語を教えています。毎年講義の最終回ではいつも学生たちに「百聞は一見に如かず」(百聞不如一見) ということわざを伝え、一度機会があれば中国に行き、実際に自分の目で見、体験して理解を深めてもらうよう勧めています。中国を訪れた時、授業で学んだことが少しでもお役に立てば幸いです。

今、世界的な流行となりつつある中国・武漢で発生した新型コロナウイルスによる肺炎に関して、このふた月余りテレビや新聞で毎日報道されています。日本国内で感染者が増えつつある現状に不安を覚えている人も多いことでしょう。一日も早い終息を願うばかりです。外出を控えることになった今は、「百聞は一見に如かず」という言葉が言いにくい

状況になってしまいました。近いうちに新型コロナウイルスをワクチンで防ぐことができるようになり、あるいはそれに応じた治療ができるようになり、いつもの生活に戻ったとき、皆さんは必ずや中国語、そして中国への関心がまた膨らんでくることでしょう。

私の専門は日中近代文学の比較文学で、とくに１００年前の中国の近代化を担う人材として日本に留学し、その後中国の文壇に登場した作家たちが留学中に日本と日本文壇から受けた影響について研究しています。来日前は高校の教員として国語を教えていました。向こうでは国語の授業は「語文」と呼ばれ、言語と文字の運用を学ぶ総合的かつ実践的な課程です。現在、この地で教壇に立って、しかも中国の言語と文字が教えられるので、とても嬉しいです。

中国語を教え始めた頃は、学生たちは知らない単語があると、辞書を引いてその単語を覚えながら文章を作っていました。今ではスマートフォンの普及に伴って、知りたい単語や表現があれば、すぐインターネットで情報が得られます。私の大学生の頃は、知りたい知識のために、朝早く図書館に行き、いろいろ調べて、やっと情報を集めることができたことを思い出します。でも、現在ではもう多くのことがネットで調べられる時代になりました。その大量の情報から、必要なものと必要でないものを見分ける能力がきわめて重要となってきています。語学の勉強も多様化している今日、中国語を勉強するのに、いろいろな資料と勉強法があり、しかもすぐネットで学習することもできます。その中から、無意味なものを排除し、必要なものだけ吸収する能力がいかに大事なことであるかを実感しています。それ故、中国語の基本的な知識を教えるだけではなく、同時に情報を集める能力と有意義なものを見い出す力も授業で身につけるよう指導する必要があります。そのため、授業の中に課題を設定し、それに関連するような様々な資料を学生たちに配り、会話や文章を作ってもらいました。その結果、皆さんが授業の中で発表した内容は、教材として使えるようなかなり完成度の高いものとなりました。このようなことを考慮して、私自身が一生懸命教えるだけではなく、それ以上に学生たち自身が学習した知識を自ら活用して表現できるような方法を取り入れています。

今後の授業に対しての私の目標は、いいリードができるようになり、また、学生たちの能力を最大限活かせるようにすることであります。このことを心がけて授業に臨むつもりです。

（国際学研究科 国際学研究専攻　第 4 期修了生 / 国際文化研究専攻　第 10 期修了生）

（2020 年 3 月 19 日原稿受理）

国際学部学位授与式から

国際学部

・総代 1 名

① 韮澤怜子「日本における母語教育の実際と可能性」立花研究室

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・**最優秀賞** 2 名

① 韮澤怜子　「日本における母語教育の実際と可能性」立花研究室

② 羽根田彩李「リメイク映画が映し出す日韓女性の生き方－『いま、会いに行きます』と『サニー』を手がかりに」丁研究室

・**優秀賞** 5 名

① 藤田萌々夏「米軍基地に反対する周辺地域住民の意識の違いとその要因－普天間基地と三沢基地の比較」清水奈名子研究室

② 三澤拓巳　「国防文学作家夏衍再考―『賽金花』を事例として」松金研究室

③ 門上友紀　「技能実習生と地域、双方にとってより望ましい受け入れの姿とは」田巻研究室

④ 大城フラビアユリエ「外国にルーツを持つ子どもの親子間コミュニケーションと言語に関する研究」鎌田研究室

⑤ 佐々木斐菜子「ミュシャのポスター作品における造形表現」出羽研究室

国際学研究科学位授与式から

・**成績優秀学生**（奨励奨学金授与）1 名

① 張　喬　「SDGs に適う生活ごみ分別収集システムとは－日瑞との対照から中国大連市の方向性を探る」髙橋研究室

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において修士論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・**優秀賞** 2 名

① 清水 友美「中学校・高等学校社会科教科書における抽象語の分析－日本語指導が必要な子どもたちへの学習支援に向けて－」 鎌田研究室

② 町田 星羅「現代社会における言語復興の意義～ハワイ語復興運動からの考察～」田巻研究室

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の大畑美優紀さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）の変更になりました。第 9 号の主な内容は以下の通り

です。1．ご挨拶　２．お知らせ　３．活動報告　４．連載コーナー　狙えインスタ映え！？　第５回アジア取材雑記　プラゴミ大氾濫に悩む東南アジア　谷澤壮一郎　/　No.9 タイの昨今－タイの塾はフルサービス－大畑美優紀　/　トコロ変わればザ☆談会　第二回　/　今旬のイチマイ　第五回　ともに感じる東南アジア　大宮勇樹　　東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていただくことを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 33 号の内容は、1 イタリア　全土の映画館・劇場・博物館などを閉鎖　2 イタリア　北部の 1600 万人を隔離　ミラノやヴェネツィアも対象　3　イタリア　全学校を 10 日間閉鎖へ　新型ウイルスの感染拡大で　4 EU 支部だより　―隔離状態の続くロンバルディア州の今―です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。

編集者のひとりごと

●新型コロナウイルスにより、東京オリンピック 2020 は 1 年間程度延期されました。前代未聞の状況ですが、前向きに捉える方が「災い転じて福となす」ということわざのようになるのではないでしょうか。つまり、プラス思考で、またポジティブシンキングに捉えていくことではないでしょうか。これから、どんな展開になるのか不安はありますが、新型コロナウイルスを「正しく恐れる」ことが一番大事なことと思います。

●2020 年 3 月 24 日（火）午後 3 時から、大学全体の学位記授与式が中止になった中で、国際学研究科学位記授与式が行われました。今回は、博士後期課程の 2 名と博士前期課程の最後の 20 期生（国際社会研究専攻・国際文化研究専攻）と 15 期生（国際交流研究専攻）の 28 名でした。恒例の記念撮影をし、30days Album のサイトに写真をアップロードしました。修了生全員が無事、必要な写真をダウンロードできましたでしょうか。限られた修了生のみのメール確認のため心配しています。今回、改めてメールアドレスの確認の重要性を感じました。1 文字でも間違えばメールが届きません。例えば、数字の 0 とアルファベットの O や数字の 1 とアルファベットの l などです。悩ましい限りです。ネットワークを生かすも殺すも、名簿管理において「最初が肝心！」だったと感じています。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP（http://www.afis.jp）で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@freeml.com

---

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会